

# 1 陳寿旅程論

三木太郎氏は著書『魏志倭人伝の世界』で、岡田英弘氏がその著書に

もしも『魏志倭人伝』を、本気でわが民族の歴史を復原する材料に使おうというのなら、矛盾した言い方で申し訳ないが、その内容をあまり本気で受けとってはいけない。

と書かれた事に対して、次のように述べられている。

たしかにどんな書物も時の政治・権力や時代意識と無縁ではあるまい。だが、そうした大きな力とかかわりながら、なお比較的客観性を保持し、本来の目的性を貫くことが、史家のあるべき姿だったのではないか。中国の史書に、司馬遷の『史記』以来、そうした記録者(史家)の精神が流れていることを否定することはできないように思われる。

時代の制約や知識の不正確さが原因で起こる史書の誤りと、思想家のイデオロギーや現実政治への対応の姿勢と同次元の現象と見て、中国史書の事実性を不当におとしめることは、むしろ心して避けるべきではないだろうか。

肝に銘じなければなるまい。唐には李賢という、死をも覚悟して母の専制政治を告発する注釈『後漢書』を作成した皇太子もいた。いかに相手が強大な権力であろうと、真実を貫く人は居る。そして、いつの時代にもそのような人はいる。人間の精神性を不当におとしめてはなるまい。

だが、三木氏の憂慮にもかかわらず、明治から現代に至る我国の『倭人伝』研究は、「本気で受けとってはいけない」という岡田氏の「警告」に従っている。

ほぼ定説(常識)となっていることがらがある。

- \* 『倭人伝』女王国旅程における方角「南」は「東」の誤記である。
- \* 『紹熙本』「邪馬壱」は「邪馬台」の誤刻である。
- \* 『紹熙本』「邪馬壱」は7世紀～12世紀に生じた「邪馬台」の誤写である。
- \* 『後漢書』李賢注「邪摩惟」は「耶摩堆」の誤刻である。

しかし、である。

- \* 現存する全版本「旅程」は全て「南」は「南」、「東南」は「東南」で一致している。
- \* 「邪馬台」とした版本と「邪馬壱」とした版本のどちらも現存する。
- \* 「邪摩惟」と注記した『後漢書』版本は現存するが、「耶摩堆」と注記した『後漢書』版本は見つかっていない。

これが中国史書の事実である。

我国研究者の「誤記」「誤写」「誤刻」説オンパレードは「史家の事実記録の精神性」「刊本作製学問集団の見識・調査研究」「書写生・版工・印刷工の専門性」への「貶め」そのものではないだろうか。

「(私はそれと分かっているが)歴代中国王朝の史家、学問集団、あるいは技能者集団は誰一人として「誤記」「誤写」「誤刻」に気づかず、訂正、改訂も行わず史書を編纂、刊本を作製してきた」という“思い込み”はあまりにも不遜ではないだろうか。

「南」は「南」、「東南」は「東南」、「邪摩惟」は「邪摩惟」、「邪馬台」は「邪馬台」、「邪馬壱」は「邪馬壱」、それぞれ「事実」として「本気で受けとり」、そのまま研究の原点に据えることが我が国の研究者のとるべき姿勢と私には思われる。それが三木氏の本意であろう。

『倭人伝』についてはその信憑性を疑う意見が多くある。「方角南は東の誤りである」というのはその代表である。他にも誤りと指摘する事項は数多い。「中国人は歴史の真実を書かない伝統を持っている」というような一般論さえある。

確かに、『倭人伝』は西晋陳寿が書き記した本である。著者は中国人である。この事実が我が国の研究者の『倭人伝』不信の根本にあるように思える。

『倭人伝』は洛陽から見て遠く東の海中に存在する「倭」について、22の連邦国名、女王、官、戸数、身分、家族制度、衣服、農作物、動物、木、武器、食事、葬儀、税、果ては文身、祈禱などの風俗に至るまで、ありとあらゆる情報を収集し記録している。我が国の最古の史書である『記紀』に韓国、中国の情報が少しでも記載されているであろうか。

『日本書紀』は天皇の欠落史を『百濟本紀』などから補っているが、これは百濟に関する情報を記載したのではない。百濟が天皇について収集した記録を借用したというだけのことである。

歴代中国王朝が「情報国家」であり、「記録国家」であることは、我が国の『記紀』と比較して歴然としている。

『倭人伝』への感想を述べるとしたら、「その記事には誤りがある」という不信感とは正反対である。「なぜ、これほど正確な記事を書くことができたか」という驚嘆である。

『倭人伝』女王国旅程は現代の正確なネット情報に慣れた私たちから見れば完全だとは云えない。だが、「国」「方角」「里」は現代地図上復元できる。実に正確である。

女王国旅程は魏にとって異国の旅程である。その旅程記事が魏使の見聞、調査によるものだと言うにはあまりにも正確、あまりにも詳細すぎるのである。

## 陳寿旅程は倭国情報

陳寿は女王国ルートを「倭」と「魏」の外交ルートとして書き、現代の私たちもそう受け止めているが、元来は外交ルートではない。

魏朝以前の遙か昔から「倭国」の人々が大陸の窓口である「狗邪韓国」と女王の都を結ぶ経済交流・文化交流のために切り開いた交易ルートである。

### 收租賦有邸閣國國有市交易有無使大倭監之

国々に市がある。物々交換が行われている。その商取引を取り締まる役人がいる。

倭国ではすでに商業が発達していた。国内での商業は勿論、外国との貿易も発達していた。狗邪韓国はその拠点だった。この窓口を通して倭国は中国との外交関係を持った。「狗邪韓国→伊都国→女王の都」の外交ルート、交易ルートは倭国の大動脈である。倭国がこのルートを厳重な管理下に置いたのは当然である。ルートの重要な位置にある伊都国には「一大率」が常駐していた。その任務は狗邪韓国と伊都国を結ぶ交易ルートの安全確保であろう。

このルートの「国」「方角」「里」「戸数」「官」などは倭国の基本台帳である。その情報を陳寿は知っていた。だが、一方で、連邦の中枢である22人の王とその国について陳寿はほとんど何も知らなかった。倭国は22の国名は教えたが、それぞれの王名、それぞれの国の戸数などは教えなかった。国力を測る最も基本である米の生産について陳寿は何も知らなかった。最も貴重な鉄についても陳寿は何も書けなかった。

ここには倭国側の情報管理があつたと考えてよい。重要な情報は渡さなかったのである。

このように『倭人伝』を分析すれば、『倭人伝』は中国人陳寿が作った史書であるが、その基となった情報は倭国の提供であると言えよう。

## 女王国ルートは倭国の機密

「倭人伝は倭国管理下の情報である」と考えれば、不弥国から女王国への最終ルートの記載がないことに納得がいく。

陳寿は不弥国までの「方角」「里」を知っていた。倭国は不弥国までの情報は公開したからである。不弥国は特定できる。そして、不弥国を特定すれば、投馬国も特定できる。投馬国は「不弥国の南、水行二十日」の国である。この情報は公開した。ここに「里」はないが、「日数」がある。「方角」と「日数」があれば、投馬国も特定できる。ここまでの倭国情報は詳細である。

陳寿は女王国については「南邪馬壱国」と書いた。ここには「里」がない。その上、「南」は「投馬国の南」とも「不弥国の南」とも読める。読みに決定的な決め手は無い。女王国旅程は不弥国と投馬国旅程と比べて不明確、不完全である。

「南」に関しては、通常、「投馬国の南だ」と読まれる。そのように読むと、女王国は「不弥国の南二十日投馬国」の「南」となる。倭国は不弥国から投馬国ルートは公開している。不弥国に港がある。その港に船が停泊している。「この船に乗れば二十日で投馬国に到着する」ことは知られている。「南」「二十日」の水行ルートは有明海、そして東シナ海である。途中、寄港はあっても陸行はない。二十日の航海で投馬国（那覇市）に到着する。公開された投馬国位置情報は全く正しいのである。

「南邪馬壱国」を通常のように「投馬国の南」と読む。そこに女王国は存在するであろうか。そもそも、投馬国の南には陸地がない。東シナ海である。

陳寿の「南」は「不弥国の南」と読まなければならない。情報はここまでである。この情報では女王国に到着できない。しかし、「不弥国の南」と確定できたことによって女王国旅程について推測できることがある。不弥国は港町である。そこから「水行」か？或いは「陸行」か？

陳寿は不弥国からの旅程が、水行か？陸行か？或いは、水行と陸行両方あるのか？何の情報も持たなかった。ゆえ、陳寿は女王の都への旅程について倭国情報の「南」だけ書いた。史家として誠実な態度と言える。憶測を避け、倭国情報に忠実だったといえよう。陳寿の不十分さは陳寿の責任ではない。倭国情報の不十分さである。

陳寿情報では女王国への行程が分からない。到着不能にしたのは倭国の情報管理である。都の位置は倭国にとってトップシークレットである。倭国は不弥国から先の女王の都へのルートを非公開としたのである。

実際の女王国ルートは不弥国からの有明海の「南」への「水行」だった。船は島原付近まで投馬国への船と全く同じ航路をとる。「投馬国有明南ルート」と「女王国有明南ルート」は見分けはつかない。非公開の「女王国ルート」は公開された「投馬国ルート」の蔭に隠れた。後の世の中国人史家たちも、この「不弥国→女王国」の「有明南ルート」は発見できなかった。

女王の都は熊本平野の北部、熊本市中央区京町である。都へは「有明南ルート」を進み、その後、薩摩街道の「北陸行」である。単純な道程ではない。仮に、筑後市から有明海に船出しても、京町に到達することなど誰にできようか。AIを駆使する現代研究者にしても女王の都に到達できた人は誰一人いない。

不弥国は女王国への出入国管理国である。女王国への入国も女王国からの出国も不弥国の官が担当することになる。その副官「卑奴母離」とは「人守」ではないだろうか。出入国者の監督官である。倭国は首都防衛に細心の配慮をしていたといえる。

## 李昉・徐鉉の旅程構想

『太平御覧』は10世紀編纂である。3世紀『三国志』からかなりの年月が過ぎての編纂である。撰者は李昉・徐鉉らである。彼らは陳寿と同じように「不弥国から投馬国への水行ルート」は知っていた。だが、「不弥国から女王の都への旅程」については知らなかった。陳寿は「南」と書いたが、他に何も書けなかったからである。分からないのは私たちも李昉・徐鉉たちも同じである。しかし、李昉・徐鉉たちは陳寿のように女王国旅程を曖昧なままで編纂する訳にもいかなかったと思われる。私たちが陳寿に基づいて女王国を発見しようと試みるように、李昉・徐鉉らも女王国を発見しようとした。この点も私たちと李昉・徐鉉らは同じである。

相違は、私たちは「不弥国→女王国」「南有明ルート」を発見できたが、彼らには発見できなかった事にある。正確な九州地図を持たなかった故である。従って、彼らは旅程を「不弥国」「投馬国」「女王の都」と、順進的に構想した。

### 不弥国→(二十日)→投馬国→女王の都

ところが、「投馬国→女王の都」の「日数」が不詳である。ここで、陳寿の「女王之所都水行十日陸行一月」に出番が回ってくることになる。

「水行十日陸行一月」について、安本美典氏が、『邪馬一国はなかった』で、台湾国立海洋学院大学教授謝銘仁博士の見解、「水行十日、陸行一月を帯方郡から邪馬台国までの所要日数とする古田氏の読み方は極端な読み方であって、問題にならない」を紹介している。この見解が中国人学者の共通の見解であろう。李昉・徐鉉らも、「水行十日陸行一月は投馬国から女王の都への日数」と、読んだ。そして、旅程を完成させた。

又南水行二十日至於投馬国  
又南水行十日陸行一月至耶馬臺国女王之所都

起点も終点も明確である。ここには「陸行一月」の「国名」がないのが難点ではあるが、順当である。陳寿旅程は不完全な漢文で、「極端」にも読める、また「普通」にも読める。しかし、『太平御覧魏志』旅程は誰が読んでも筋が通る旅程として出来上がった。

『太平御覧』旅程は陳寿旅程と同じではない。陳寿旅程は不完全ではあるが、倭国情報そのままの記録である。一方、『太平御覧』旅程は李昉・徐鉉らの構想である。陳寿旅程を基にした構想によって出来上がった旅程である。

構想自体は不可欠である。陳寿旅程が不完全である以上、構想するのは当然である。

陳寿の不完全さを補い出来上がった「又南水行十日陸行一月至耶馬臺国」ルートは、現実なのか？それとも、非現実なのか？問題はそこである。現代日本地図で検証してみよう。

「投馬国の南水行十日陸行一月」という「南ルート」を日本地図で探してみよう。まず、投馬国は港町不弥国の南、二十日水行の国である。この国は存在する。では、その国から南に更に十日航海する国は存在するか？そのような国は、日本地図にない。

陳寿の不完全な旅程を基に、真の女王国ルートを構想することは、李昉・徐鉉ら10世紀の中国トップの知識人にとっても簡単ではなかったと言えよう。李昉・徐鉉らの国は無い。

この舞台に我が国研究者が登場する。「いや、南は誤り。本当は東」と言う。陳寿のみならず、李昉・徐鉉らの方角も全て誤りであると主張することになるが、日本地図を知っていればこのように主張するのは当然である。投馬国の南には国が存在しないことは誰でも分かる。



我が国研究者に従って、「南」を「東」に変える。「東水行」の海は瀬戸内海、または日本海となり、日本地図と合致する。では、この「東ルート」を進んでみよう。

私たちの得た当時の水行速度は、一日約40kmである。不弥国から投馬国までは、水行二十日、約800kmである。そして、投馬国から水行十日、約400kmである。水行の合計は1200kmである。不弥国から1200kmの航海で「ある国」に到着する。そこから、さらに陸を一月、約600km歩く。「東」にルートを変更して、瀬戸内海、日本海を水行したとしても、我が国研究者の国は日本地図で見つからない。いや、見つからないことはないが、東京都のはるか向こうに存在することになる。我が国研究者の国は遠すぎる。

## 陳寿倭国は九州の連邦国家

陳寿の『倭人伝』は倭国発の情報である。倭国は全ての情報を公開したわけではないが、公開した情報は真実である。『倭人伝』は中国人陳寿が書いた本であるが、その情報は倭国発である。『倭人伝』の「真」の著者は倭人と言っても良い。

陳寿の「南」は倭人の「南」である。陳寿の「東南」は倭人の「東南」である。倭人の日常生活の「南」「東南」である。この「南」「東南」を誤りとして、「東」「東北」に訂正するなどもつてのほかである。

中国人著者への不信に立って、「陳寿の南は東の誤りだ」といった発言は天に唾する行為であると言えよう。

岡田英弘氏は「本気でわが民族の歴史を復原する材料に使おうというのなら、矛盾した言い方で申し訳ないが、その内容をあまり本気で受けとってはいけない。」と述べているが、真理は逆説的である。こう言うべきである。

『倭人伝』はわが民族の歴史を復原する材料である。何故なら、『倭人伝』は倭人による著作同然と言えるからである。その内容を本気に受けとるべし。

『倭人伝』はわが民族による著作同然の史書である。そこに記された歴史はわが民族の歴史である。だが、まちがってはいけない。その歴史は、「山結」と名乗り、歴代中国王朝、歴代韓王朝と交流、長崎、佐賀、福岡、熊本4県に存在した30連邦国家の歴史である。

決して「神武天皇家」の歴史ではない。「倭国」と「神武天皇家」とは全く別の国家である。当然、『倭人伝』と『記紀』は全く異なる歴史書である。『記紀』と『倭人伝』を結びつけて解説するという手法は誤りである。ヒミコはヒミコ、アマテラスはアマテラスである。邪馬台は邪馬台、大和は大和である。

『倭人伝』は極東アジアにおいて国際的な地位を確立していた「倭国」の歴史書として、そのままに尊重され、そのままに研究されるべきである。

最後に、陳寿に対する不審の源である旅程について、紛れのないようその詳細をここに日本地図と共に明記して、陳寿の名誉を回復しておこう。

- (1) 帯方郡から女王の都までは「**萬二千余里**」である。  
帯方郡から狗邪韓国(金海)まで……………**7000余里**  
狗邪韓国(金海)から末廬国(唐津市)まで……………**3000余里**  
末廬国(唐津市)から女王の都(中央区)まで……………**2000里**

- (2) 「**水行十日陸行一月**」は帯方郡から女王の都まで所用日数の合算である。

帯方郡から狗邪韓国(金海)まで……………水行2日・陸行27日  
 狗邪韓国(金海)から末廬国(唐津市)まで……水行5日  
 末廬国(唐津市)から女王の都(中央区)まで…水行3日・陸行4日

- (3) 「水行十日陸行一月」は里に換算すると「萬二千余里」である。
- (4) 「南至投馬国水行二十日」、「水行」は東シナ海である。「水行二十日」は里に換算すると「約10600余里」である。投馬国は那覇市である。

